2023年（令和５年）
１月号（No. 932）
公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価１部　150円
会員の会報購読料は年会費に含まれています
URL●http://www.jac.or.jp
e-mail●jac-room@jac.or.jp

河口慧海のチベット潜入経路にまつわる1枚のメモ

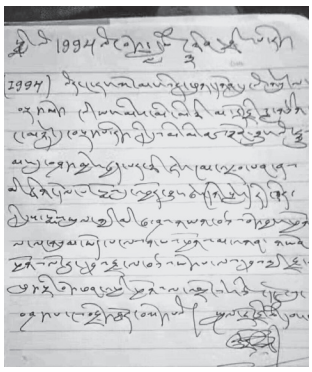
根深　誠

謎とされてきた河口慧海のチベット潜入経路を巡る筆者の旅は、当時、外国人入域禁止だったトルボ地方への特別許可をネパール政府から取得した１９９２年に始まる。以来、チベット側にある白巌窟を確認、そして、今回は国境の峠の位置が解明された。その論拠を明らかにするとともに、経緯を報告してもらった。

残されていた1枚のメモ

河口慧海（以下、慧海）がネパール・チベット国境の峠を越えてチベットに潜入したのは、１９００年７月４日である。この事実を裏付ける１枚のメモが、地元の寺院に残されていた。チベット語で記されたそのメモの内容は、概ね以下のとおりである。

《１９９４年、私はコマン村にあるセルフグ寺院で３年間修業していました。そのとき私は、偉大な曽祖父ニマ・ドルジェと１ヶ月間ともに暮らしました。その間、曽祖父は私にいくつかの歴史と過去の出来事について教えました。その中で特に印象に残っているのは、ある日本人がトルボに来た話です。彼は僧侶でした。当時、ムィ村の何人かの村人は、ヤクを連れてチャンタン（北方平原）に向かっていました。チベットへ行くには３つの経路があります。右はマンゲン山、左はロール山、中央がザラ山です。彼ら（ムィ村の住人と日本人僧侶）は、ザラ山の峠を越えてチベットのフェンチ地方に行きました。以上は、私の曽祖父の語りに従って書かれたものです。
トゥルク・ドルジェ・ツェワン》


書き残されていた１枚のメモ

このメモを書き残したトゥルク・ドルジェ・ツェワンは、より詳しく私に語った。それによると曽祖父のニマ・ドルジェには妻が２人いた。妻の１人はコマン村の住人で、もう１人はムィ村の住人だった。日本人僧侶の話を曽祖父ニマ・ドルジェに伝えたのは、ムィ村の妻である。

ほかにも、トゥルク・ドルジェ・ツェワンの話を聞いて分かったことが２点ある。日本人僧侶はゲロン、すなわち妻帯しない僧侶であること。そして、その日本人僧侶に接触した地元ムィ村の僧侶と同年配に見えたということである。地元の僧侶は、存命であれば今年（２０２２年）１４７歳になると言う。ちなみに、慶応２（１８６６）年生まれの慧海は１５６歳、地元の僧侶より９歳年長ということになる。１９００年当時に直すと、慧

目　次

河口慧海のチベット潜入経路にまつわる１枚のメモ ……1
秩父宮記念山岳賞を受賞して ……4
南西稜からのアマ・ダブラム登頂 ……6
追悼　時代の流転を感じる
石坂先輩のご逝去 ……8
連載■ご当地アルプス登山案内
㉕六甲アルプス ……9
㉖摩耶アルプス ……10
東西南北 ……12
活動報告　山行委員会 ……14
図書紹介 ……14
会務報告 ……16
新入会員 ……17
図書受入報告 ……17
ルーム日誌 ……18
会員異動 ……18
INFORMATION ……18
編集後記 ……19

▶日本山岳会事務（含図書室）取扱時間
月・火・木 ……10～20時
水・金 ……13～20時
第２、第４土曜日 ……閉室
第１、第３、第５土曜日 ……10～18時

キティンの遺跡。集落が形成され、寺院や王城があった

海34歳、地元の僧侶25歳、ともに若い世代である。

以上の話から、ムィ村を経由してチベットに行った日本人僧侶は、時代から判断して慧海と同一人物かと思われる。私にこの話を伝えたトゥルク・ドルジェ・ツェワンは、「トゥルク」すなわち「化身」、つまり生まれ変わりである。誰の化身なのかといえば、トルボブッダという聖者の8回目の化身なのである。

トルボブッダは、かつてトルボ地方に君臨したキティン王国の王女の長男である。この地方に仏教を広めたことから現在も尊崇され、シーメン村のプー・ゴンパ（寺院）にチョルテン（仏塔）が建っている。5、6世紀ごろ、キティンの一族が西チベットのシャンシュンから移住して来たのち、王国を築いて繁栄したのが13世紀、その後、自然災害で壊滅した。遺跡が山腹に現存している。地元の言い伝えでは、雪崩、土石流が原因で壊滅したらしい。

ムィ村の移牧地ニンレッ。二股になっていて、右股がマンゲン・ラに、左股がゴップカル・ラに通じている

キティン王国の壊滅後、文物は下方にあるヤンツェル・ゴンパに移された。この寺院は慧海の日記に出てくる「ヤムデル」である。慧海はヤンツェル・ゴンパから、現在は廃道に帰した下道を経てムィ・コーラ（谷）をたどっている。この下道は、その後の1956年、この地を踏査したイギリスのチベット学者D・スネルグローヴも、シーメン村への途次たどっている（D・スネルグローヴ著、吉永定雄訳『ヒマラヤ巡礼』参照）。

ゴップカル・ラにあるゴトウ・ツォ。対岸の丘が国境

慧海やスネルグローヴがヤンツェル・ゴンパから下道をたどったのは、それなりに事情があってのことである。とりわけ慧海の場合、チベットへ行くには、地図を見て分かるようにムィ・コーラの手前にあるクン・コーラの方が近い、との理由から推定されがちだが、それは大間違いも甚だしい。

「あなたは間違っていない」

クン・コーラは、近年まで「人の道」として使われていた。これに対してムィ・コーラは「家畜の道」である。前者は上部がゴーロ状で、家畜には不向きだった。近年（1990年代初頭）、麓にあるサルダン村の住人が音頭を取って整備事業を実施したことで、家畜が通行できるようになったのだ。後者は昔からの移牧の谷として知られている。その理由は、国境に位置するゴトウ・ツォ（湖）という湖から流れ出る渓流が、緑を育んでいるからである。

ムィ・コーラは、昔は冬も利用されていたという。昔はトルボ地方からチャンタンに家畜を連れて行き、チャンタンの人々がその面倒を見ていた。チャンタンとトルボ地方はチベットに帰属していたのであり、2度にわたる戦争の結果、ネパールが勝利して版図を拡大したという歴史的な経緯がある。

私がトルボブッダの化身ことトゥルク・ドルジェ・ツェワンと会うのは1992年、2006年に次いで3度目だ。過去2回はシェー・ゴンパへの途次、立ち寄ったのであり、慧海のチベット潜入については話題にしなかった。しかし、今回はどこの峠を越えたのか、

これまでの長年の踏査で1ヶ所だけ未確認の峠が残っていて、それを検証するためゴップカル・ラ（峠）を目指して来た旨を話した。

「あなたの考えは間違ってはいませんよ」

あまりに唐突で返答に窮するようなこの言葉に、私は唖然とするほかなかった。長年、探し求めてきた解答が、思いもしないかたちで飛び出してきたのだ。打てば響くというか、それよりも「啐啄同時」とは、まさにこうしたときの間合いを言うのかと思った。

確かに、私の考えは間違ってはいなかった。慧海はヤンツェル・ゴンパからムィ・コーラをたどってムィ村を通過し、ゴップカル・ラを越えたのである。この間の行程は、7月3日から4日にかけてだが、慧海の日記の中で、削除されて判読不明の部分が最も多い箇所である。なぜ削除したのか知る由もないが、その中から経路を示す文言を抽出すれば、以下のようになる。

①ヤムデル②巌屋③犛牛④草⑤草々⑥犛牛⑦草上⑧犛牛⑨金沙⑩国境

当然のことながら、①から⑩まで、これらの断片的な文言の全てを現実の地勢は満たしている。言い方を換えれば、慧海の記述に間違いはなかった。ただし、慧海のたどった経路がムィ・コーラであることを知らなければ、判断ミスに陥るくだりがある。以下に、その該当箇所を抜粋しよう。

《（ヤムデル）ト云フ其レヨリ上リテ下ル事半里余ニシテ》

慧海は、チベット国境から流れ下る谷の道を遡っている。地図を参考に文脈から判断すれば、誰もがヤンツェル・ゴンパから半里余りの谷、すなわちクン・コーラを上ったと捉えがちである。ここに過ちの原因が隠されている。地図からだと、半里余りと記された距離は判断材料になり得ても、「上リテ下ル」という登高が読み取れない。抜け落ちている。

実際には高度差２００ｍほどあって、たどってみれば登高が意識される。それともう一つ、「其レヨリ」という起点になる場所はヤンツェル・ゴンパではなくて、文字どおり「上リテ下ル」場所の取付地点ということになり、クン・コーラを徒渉した地点である。道は上り切った地点から左折して、ムィ・コーラに下りていく。上り切った地点からは、左手の山腹に、先に述べたキティン王国の遺跡が望まれる。ここはトルボ地方発祥の地でもある。

ゴップカル・ラこそ慧海の越えた峠

以下、紙面が限られているので詳しくは報告できないが、慧海が国境から眺めて日記や『チベット旅行記』に描写した、川の流れるチャンタンの風景が眺められる地点は、ゴップカル・ラという現在の国境の先にある。昔と異なり、現在は中国による国境警備が厳重になり、現地住民ならともかく、外国人の立ち入りは無理である。さらに現在は、地元の交易も禁止になっている。

なお、慧海の日記に記された⑨金沙は、持ち帰って専門家が調べた結果、白雲母と判明した。確かに、渓流の底の砂地で一面にキラキラ反射しているのだ。

〈注：当該地域は現在、一般的に「ドルポ」と表記されているが、この稿ではあえて古称の「トルボ」を採用した。〉

（紀行作家、青森支部会員）

慧海が描写したチャンタンに川の流れる風景（ムィ村住人：提供）

AWARD

秩父宮記念山岳賞を受賞して

新宮山彦ぐるーぷ世話人代表　沖﨑吉信

大峰南奥駈道の再興と山小屋建設並びにその維持管理活動が評価され、２０２２年12月３日に、日本山岳会から「第24回秩父宮記念山岳賞」を授与いただきました。この紙面をお借りして、篤くお礼申し上げます。

「千日刈峰行」を開始

私たち「新宮山彦ぐるーぷ」は修験の団体ではなく、「山を歩いて自然に親しみ体験を通してモノを考えよう」というテーマで昭和49（１９７４）年４月に発足以来、近郊の山行を主に各種行事を重ねてきました。

そのようなところへ、大阪府河内長野市在住の前田勇一行者という方と知り合いになりました。前田氏は大峰を歩く行者の全てが吉野から峰入りし、太古ノ辻から前鬼へ下ることに不審を抱かれました。明治初年の神仏分離令・廃仏毀釈と修験道廃止令が尾を引いていて、南半分の道はヤブに閉ざされ、通行困難となっていました。前田氏はそこで、この南奥駈の道（太古ノ辻～熊野本宮）を蘇らせ、日本古来の精神文明を見直そうと一念発起され、「奥駈葉衣会」なるものを発足されました。

熊野に住んでいる我々としても傍観することはできません。熊野浮上の一役にもつながるものと、積極的にこの会を支持したのでしたが、大黒柱の前田氏は十年来の病が次第に悪化し、遂に昭和56（１９８１）年５月８日、68歳をもって不帰の客となってしまわれました。

前田氏は亡くなる１年半前、最後の闘志をかき立てて東奔西走、孤軍奮闘の結果、持経宿山小屋を建設されたのですが、その後、病状が悪化して入院されましたが、死の直前まで大峰南奥駈の再興に強い想いを馳せられていて、病床から幾度も書簡が送られてきました。

前田氏亡き後は、奥駈葉衣会は自然消滅となってしまいました。持経宿山小屋の管理は我々「新宮山彦ぐるーぷ」が引き継ぐこととなって、屋根のペンキ塗り、便所の汲み出し、薪の補給などを継続してきました。

しかしながら、この山小屋を活かすにはただ管理するだけでは不十分で、茂った道を刈り拓くしかないと結論、昭和59（１９８４）年６月から「千日刈峰行」と銘打って、１泊２日の作業を始めました。比叡山で行なわれている千日回峰行になぞらえて、果てしなく続くという意味を込めて命名したのでした。

足掛け３年24回、延べ３１５日の出動で、47名が全行程45㎞の内、刈拓きが必要な24㎞を刈り拓きました。

それは晴れの日ばかりでなく、雨や風、暑熱、積雪の日もあり、そのうえ夏はブヨやダニに悩まされ、ウルシにかぶれる者や、ときには刈払い機の不調に泣いたこともありました。猛烈に茂った部分のスズタケや灌木帯では、倒れ込んでくるこれらの束でしばしば鋸の回転が止まり、その排除に奮闘し、機械を振り回そうにも腕がなえ、へとへとに疲労困憊したものでした。

一方、どこからも資金的支援がないところから、参加者はそれぞれ弁当はもちろん参加費を拠出して、鋸刃の購入や燃料代、そして泊まりの食料代に充当しましたが、並の奉仕活動ではなかなかできないことでありました。

作業は、原則的に１泊２日で実施したので持経宿山小屋泊まり。ほかは行仙岳下のトンネル口や葛川トンネル口に、幾度となくテン

表1

	期　　間	参加者数	出動回数	延べ日数
第1次刈峰行	昭和59年6月～昭和61年9月	47名	24回	315日
第2次刈峰行	昭和62年4月～平成3年12月	46名	19回	174日
第3次刈峰行	平成5年4月～平成11年11月	50名	20回	275日
計			63回	764日

トを設営したものでした。この刈峰の行程表は全て巻尺で測ったことから、太古ノ辻から熊野本宮までのほぼほぼ確実な距離をつかむことができたことも一つの収穫でした（表1参照）。

32年間を要した環境整備

1巡目が終わったところで記念の標柱を太古ノ辻に設置して、「これより南奥駈」として人々の関心を南へ向けることとしました。この太い丸太を担ぎ上げるのもひと苦労でしたが、以来、厳然と立って吉野から奥駈を果たしたと考えて前鬼へ下る大方の人々に、「これではあなた方の奥駈は、半ばを歩いたに過ぎないのですぞ」と示しているかのようでした。

そして、私たちは本宮から刈り拓いた道を2泊3日で歩いて3ヶ年の成果を確認し、満足したものでした。だが、この道は放っておけばまた元のヤブ道に戻ってしまいます。そこで、4年目から2巡目の刈峰行に入りました。2巡目は昭和62（1987）年4月18日から始めて、平成3（1991）年12月まででほぼ終了したのですが、その途中で、新たな課題に直面することとなりました。

それは玉置（たまき）神社参籠所から持経宿山小屋間は20㎞あり、健脚者でも12時間以上かかるところから、これでは団体を連れては来られないという声が挙がって、結局、この中間に山小屋を建てねば、根本課題である南奥駈の再興はできないという結論に達したのでした。

玉置神社と持経宿山小屋の中間で物資の補給に最も良い拠点として、佐田ノ辻と呼ばれている十津川村と下北山村との接点であり、昔、通信の道として往還した峠が選ばれました。

さて、山小屋を新たに建設するとなれば、いろいろ要件を整えなければなりません（表2参照）。

表2

	課　題
①	水場が近くで得られるか
②	小屋を建てる敷地があるか
③	敷地を借用できるか
④	建設資金が充足できるか
⑤	労力が提供（奉仕）されるか
⑥	建設を引き受けてくれる棟梁がいるか
⑦	ヘリコプターがチャーターできるか
⑧	その他、行政の許認可が受けられるか

弱小団体である「新宮山彦ぐるーぷ」が取り組めるものか大きな疑問でしたが、千日刈峰行を熊野浮上に懸けた意気込みで乗り切ろうと、実行に踏み切りました。

前記課題を一つ一つクリアーして平成元（1989）年、着工へ漕ぎ着け、そして翌平成2年7月、竣工となりました（表3参照）。

さらに翌年には平治宿山小屋の建て替え、平成6年には深仙灌頂（じんせんかんじょう）堂の修復、小屋の建て替えなど毎年新たな目標を立て、休む間もなく工事を続ける当時の玉岡代表を指して「これじゃ、山彦ぐるーぷじゃなくて山彦建設か、いや玉岡組か玉岡建設だよ」という冗談が冗談でなくなったほどでした。「決して無理をしないようにしてください」と言いながら次々と作業の注文を出す玉岡代表に、仲間内では「玉岡は無理をするなと無理をさせ」という川柳まで生まれたと先輩から聞いています。それでも汗を流すことが私たちの役割と会員は山に登り、作業を続けました。

表3

名　称	区　分	竣工日	収容人数
① 行仙宿山小屋	新　設	平成2年7月	40名
② 行仙宿御堂	新　設	同上	
③ 平治宿山小屋	建て替え	平成3年6月	12名
④ 深仙小屋	建て替え	平成6年10月	8名
⑤ 深仙小屋灌頂堂	修　復	同上	
⑥ 千年檜祠	新　設	平成14年4月	
⑦ 行仙宿管理棟	新　設	平成15年7月	10名
⑧ 持経宿山小屋	大改修	平成27年8月	25名
⑨ 持経宿御堂	大改修	同上	

昭和59年に刈峰行を開始して平成27（2015）年の持経宿山小屋大改修まで32年間、約2200回を要して大峰南奥駈の環境整備は完了しました。

現在は、それらの維持管理活動が主であります。この間の刈峰行や小屋などの整備に関しては、会員作業者はもちろんのこと、多くの皆様からご支援・ご協力をいただきました。また、これらの行事を通じて各教団、各山岳団体、一般登山者をはじめ、地区の皆さんとの交流や付き合いにも展開拡大していきました。

会員の減少や高齢化など課題も多いですが、今後も「積善陰徳」を旨とし、南奥駈の黒子として地道に活動していく方針です。

REPORT

南西稜からのアマ・ダブラム登頂

広島支部アマ・ダブラム登山隊

若者たちにぜひ海外登山経験を

隊長　吉村千春

誰もが初めて行く海外登山、間違いなくその後の人生に大きな影響を与える。それが若ければ若いほど、その大きさは計り知れない。私の場合は、大学を出た年の夏、原真さんが主宰する高山研究所隊のパミール国際キャンプだった。連れて行ってもらった遠征ではあったが、深い感動を受け、山を中心とした人生を歩んでゆきたいと考える機会となった。

さて今般、広島支部創立25周年記念事業として、アマ・ダブラム峰遠征を企画した。頑張っている支部ＹＯＵＴＨのメンバーに、ぜひ海外登山の経験をしてもらいたかったからだ。ルートについては北稜も候補に上がったが、シェルパ登山、しかもフィックス・ルートで確実に登頂したいという皆の希望で南西稜となった。

結果は、課題が残るものとはなったが、厳しい状況の中、なんとか踏みとどまって皆、無事に降りて来てくれた。特に大田隊員は、自らの登頂を諦め、高度障害が出た大野隊員に下山を促した判断には、大変感謝している。

ＢＣキーパーの私はアタック隊見送りの際、高熱で不覚にも倒れてしまい、シェルパやエージェント社長と、隊員優先のタクティクスについて十分な交渉ができずに終わってしまった（カトマンズ下山後、コロナ陽性と判断された）。このことも全員登頂につながらなかった一つの原因だった思う。ただ、帰国後、皆が海外の山に再度チャレンジしたいと知って、救われた気持ちにもなった。次は、ぜひとも皆が夢を叶えて欲しい。そして、若者が自由に海外の山々を登れる平和な世界に、早くなって欲しいと切に願っている。

初めての海外遠征

大田由孝

平日にもかかわらず、広島空港にはたくさんの支部の仲間たちが集まってくれていた。今回の遠征に際して多額の支援金だけでなく、壮行会を開催してもらい、多くの応援をいただいた。「日本山岳会に入っていてもメリットがあるのかなぁ、辞めてもいいかな」と考えていた時期もあった私には、本当に予想を超えた、出発までの感謝の日々だった。

待ち望んでいた出発だったが、たくさんの不安もあった。出発までパッキングや事前の送金、エージェントとのやり取り、コロナ関連の書類の準備、そして約1ヶ月近く休むことになる会社での段取りなどで「山」のことを調べる時間がほとんどなかったこと、そして、一番の不安は7月の初めにメンバーが決まり、4人がそろって顔を合わせたのは今日が初めてということであった。メールやＬＩＮＥで準備をしてきただけで、本来の目的であるアマ・ダブラム登山について顔を付き合わせ、話し合うこともできなかったことだ。

カトマンズと飛ばない飛行機

トリブバン国際空港に着陸すると、同乗していたネパール人たちから歓声と拍手が起こる。こんなことは初めての経験だ。普段の着陸は、そんなに危なっかしいのかと驚いたが、カトマンズの街に出ると理由が分かった。ちょうどダサインというネパールでは大切な祭りの期間で、街は閑散としていた。長く出稼ぎに出ていて、久しぶりに国に帰って来た喜びだったのだ。なぜだか少し嬉しくなった。

翌日はカトマンズで1日、登山道具のチェックを行ない、しばらく飲めないであろうビールを楽しみ、翌朝早くにラメチャップ空港へ向かった。窓から見える景色は全て新鮮で、4時間の移動は短く感じた。順調だったのはここまで……。まさか空港で4日間も待機し続けるとは、思ってもいなかった。ヒマラヤ登山の厳しさを初めて感じた日々だった。

脱出～キャラバン～高度障害

飛ばない飛行機を各国からの登山者、数百人とともに待ち続けた4日目、遂に決断する。ヘリコプターでのアプローチである。あまりにも高額な手段だが、これ以上限られた日数を減らすことは、今後の行程に影響を及ぼしてくる。

4日間も待ち続けたラメチャップ空港からフワリと浮き上がったヘリは、たったの20分くらいで標

高２８６０ｍのルクラの空港に降り立った。ヘリから空港の建屋まで小走りで向かうと、経験したことがない息苦しさを感じた。

間もなく日没、高度順応の必要もあるし、今日はルクラでそのまま宿泊するのだろうと思ったが、同行するエージェントの社長から、モンジョまで移動すると言われる。いきなりのナイト・ハイクである。少し釈然としなかったが、日本を出発してほとんど動いていない我々は、前に進むことができるのが嬉しかった。今思うと、ここからが、自分たちで考える登山ができなかった始まりだった。そして、１日も高度順応の日がないまま５日目、ＢＣに到着した。大野雅樹隊員はキャラバン３日目あたりからひどい喉の痛みがあり、歩くのも厳しそうだった。

独りアマ・ダブラム山頂に立った原駿介隊員

１日だけの休息日とアタック そして原駿介隊員の登頂

ＢＣに着いた翌日、ハイ・キャンプまで順応を兼ねた往復を行なうことになる。体調が悪そうな大野が熱を測ると39度２分、パルス・オキシメーターの表示は60台であった。大野はテントで安静にし、大田、原、エージェント社長の３人でハイ・キャンプへ向かう。すぐに高度は５０００ｍを越え、味わったことがない息苦しさを感じながらハイ・キャンプに到着する。

休憩をしている最中に、エージェントから「明日、ここに泊まり、そのまま山頂へのアタックをする」と言われる。「えっ、もう⁉」と驚くと同時に今、ＢＣにいる大野はどうなるのだ？　と怒りが沸いてきた。明日までに大野が回復しなければ、大野はアタックにすら参加できないと言うのだ。日本の仲間からしばらく安定した天気が続くという情報ももらっているなか、なぜそんなに急ぐのか理解ができない。下山中に直談判し、翌日の１日だけが初めての休息日となった。

休息日を終えると大野はかなり回復し、同行の許可が出る。心から嬉しかったが、全く本調子ではないので心配だ。そして10月17日、遂にピークへ向けアタックを開始する。重たい荷物を抱えハイ・キャンプに到達。翌日、Ｃ２を目指す。ほとんどが岩稜帯で、Ｃ２手前のイエロー・タワーで少し苦労したが、岩稜の細尾根に無理矢理整地したＣ２に到着、標高は６１００ｍを越えた。

４時間ほどの仮眠で12時起床。起きると３人とも頭痛と少し吐き気を感じる。暗闇の中、遂にピークへ向けてのアタックが始まった。原が先行し、大田、大野で入れ替わりながら進む。最後の雪壁で、上から意識のない登山者がロープに巻かれ滑り降りてくる。どこを見ても神様がいそうな絶景の中、不思議な感覚だった。

前を行く原がピークの稜線に見えたころ、大野の動きがさらに鈍重になってくる。ユマールを掛け替える場所で膝をつき、少し斜めになっている大野の顔を覗き込むと目を瞑り、凍った涙の線が張り付いていた。声を掛けても反応がない。一瞬で「もう降りよう」と決断した。高度計を見ると６７５０ｍ、上を見ると山頂の手前で待っている原の姿が見える。いろいろな想いが巡ったが大野を「降りるで⁉」と大きな声で起こし、２人のピークへの挑戦は終わった。

原が登頂してくれたことも、この決断につながったのだと思う。ＢＣに戻った後、Ｃ２から下山までほとんど記憶がない大野の話を聞き、下山は正しい決断だったと自分を慰めた。

＊

帰国まで９日間を残し、登山を終えることになった、初めての高所登山、全員で山頂に立ちたかった。高度順応をする時間も十分に残っていた。悔しい気持ちのままカトマンズで５日間を過ごし、日本に帰国した。広島空港には、またたくさんの仲間たちが集まって来てくれていて、一緒に出迎えてくれたメンバーの子どもから、手作りの金メダルを首に掛けてもらった。その瞬間、張り詰めていた様々な気持ちが和らぎ、目頭が熱くなった。

〈この登山隊は、本会の海外登山助成を受けて実施されました〉

追悼
OBITUARY

時代の流転を感じる
石坂先輩のご逝去

神﨑忠男

1953年の第1次日本山岳会マナスル登山隊（三田幸夫隊長）で、山田二郎、加藤喜一郎、石坂昭二郎の3隊員は、第9キャンプ（7500m）から頂上に向かって出発した。ここに至るまで酸素の節約などで高度の影響をかなり感じていて、頂上まで高度あと375mを残す7750mで登山を断念した。このとき石坂昭二郎先輩が登頂していたら、マナスル初登頂は1953年6月1日となり、登山の歴史も変わっていたと、後輩の一人として残念に思っている。

石坂会員は、日大山岳部において私の12年先輩に当たる。無口で沈着冷静、目付きが鋭く、大学山岳部という独特な雰囲気の中で、雲の上の先輩。怖くて近寄り難く、必要最小限な触れ合いはあったものの、どちらかというと避けていた先輩だった。

1997年10月4日、日大山岳部OB会が上高地の日本山岳会山研で開かれた折、下山に徳本峠を越えて帰る石坂先輩らのパーティに同行させいただいた。半纏（はんてん）姿にゲートルを巻いて、小さめのキスリングにコウモリ傘といういで立ち。古風というか古典というか独特の雰囲気で、髭と無口が登山家としての威厳をさらに醸し出し、後輩の私にとっては相変わらずとっつきづらい……。

しかし、ときには後輩として先輩のご機嫌伺いも必要かと、びくびくしながら徳本峠の昼食時に話し掛けさせてもらった。マナスル登頂断念のときの心情を尋ねたのだが、私は、石坂先輩から残念無念で、いやなことを聞くなと怒られるのではないかと、覚悟もしていた。ところが、不気味な苦笑いとともに、「こんなものと思って、また来るわ」ということしか感じなかったと、あっけらかんとしてそっけない返事だった。

その石坂先輩が2022年10月13日に、94歳でお亡くなりになった。もうマナスル登山隊のお話を聞ける会員がいなくなり、時代の流れを感じさせられる。

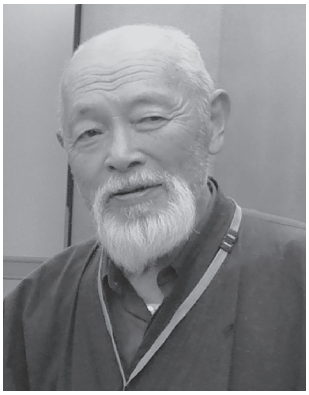
マナスル登山の帰り道に見たヒマルチュリ（7893m）に魅せられて、帰国後、金坂一郎先輩を中心に日大山岳部の仲間とヒマルチュリ登山計画を立てたが、資金面やメンバーの問題などから行き詰まり、日本山岳会の計画として取り上げてくれるようお願いし、ヒマルチュリ登山隊が実現した。

1958年7月、まず金坂・石坂両先輩が、先遣隊として偵察に出た。本隊は村木潤次郎隊長の下、長大な東尾根から挑んだが、雪壁と岩稜に阻まれ、天候にも恵まれず7400mで登攀を断念。翌年の60年5月24日、慶應義塾大学登山隊が初登頂を果たす。

石坂先輩が書かれた『ヒマルチュリ日記―三度目のヒマラヤ―』を読むと、一時代を画した日大山岳部の先輩たちの、ヒマルチュリへのこだわりが伝わってくる。

その後、後輩たちが1981年に次ぐ2度目の挑戦で86年秋、岡田貞夫隊長の下、困難なルートの南稜から最後の難壁を登り切り、古野淳ら4人が初登攀に成功している。このように、ピーク29を含む日本人によるマナスル三山初登頂への道筋を立てた石坂先輩が残したものは大きい。

石坂昭二郎先輩の功績を称え、ご冥福をお祈りいたします。安らかにお眠りください。　―合掌―



石坂昭二郎（いしざか・しょうじろう）
会員番号4037
1928年　新潟県小千谷市に生まれる
1947年　日本大学経済学部に入学するとともに山岳部へ入部
1951年　東京出版販売㈱に入社
1953年　日本山岳会に入会
1956～58年　理事を務める
1953年　第1次日本山岳会マナスル登山隊に参加（最年少、24歳）
1958年　ヒマルチュリ登山先遣隊
1959年　日本山岳会ヒマルチュリ登山隊に参加
1962年　日大ムクト・ヒマール学術登山隊長
1974年　日大ヤルン・カン登山隊隊長
2022年10月13日　逝去、享年94

連載■ご当地アルプス登山案内25

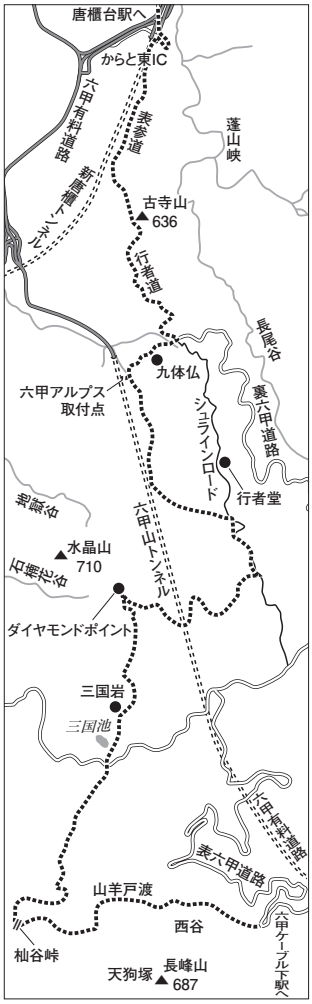
六甲アルプス

関西支部　重廣恒夫

六甲連山は、明石海峡から立ち上がった山稜が徐々に高度を上げながら東に延び、最高峰（931m）を経て宝塚市内を流れる武庫川に裾を落としている。東西30km、南北8kmの平凡な山塊ではあるが、緑豊かな自然の潤いを街並みに与えるだけでなく、豊富な水脈は美味しい水を供給し、日本酒造りに適した宮水は、灘五郷という日本一の酒造業地帯を生み出した。

山上の随所で、須磨から芦屋、西宮、尼崎までの市街地と、広大な埋立地に建つ住宅地や工場群が見える。さらに、東に生駒山や大阪平野、南に金剛山や紀伊水道、空気が澄んでいれば紀伊山地や四国・中国山地から丹波高地の山並みを見ることができる。夜ともなれば1000万ドルの夜景を堪能できる、日本有数の「都市山」でもある。

六甲山に新しい息吹を吹き込んだのは明治の開港以降、神戸にやって来た居留外国人たちだった。彼らは六甲山をスポーツの場として登山やゴルフ、スキー、スケートなどを楽しんだ。彼らによる登山の提唱と登山道の整備は麓の住人にも大きな刺激を与え、多くの山岳会が誕生し、毎日登山は世代を超えて今に引き継がれている。また、藤本九三や加藤文太郎らの活動は、近代アルピニズムの先駆けとなった。古くから登山者に親しまれてきた六甲山には、枝道を入れると400を超える登山道があり、その中にアルプス的景観を持つコースも多い。



【コースガイド】

六甲アルプスは短いので、裏六甲の古寺山から六甲アルプスを登り、その昔、居留外国人が「ゴートリッジ」と呼んだ「山羊戸渡（やぎのとたり）」を下るコースを紹介する。

古寺山の名は、平清盛ゆかりの多門寺が山の上にあったことに由来している。神戸電鉄有馬線の唐櫃台（からとだい）駅の改札口を出て住宅地を南東に進み、逢山峡方面を目指す。ほどなく阪神高速北神戸線の高架下をくぐって舗装路を進む。登り切った分岐で右へさらに舗装道路を登り、そして再度、高速道の高架下をくぐって左折する。高速道から六甲有料道路に続く車道に並行して西に延びた舗装道路を少し進むと、左手に表参道（北尾根）の登山口がある。

落葉の堆積したフェンス沿いの道を登り切ると神鉄六甲駅からの登山道に合流する。その後、西面から何本かの道が合流し、やせ尾根上のしっかりした道を進めば、「修業岩」や「清盛の涼み岩」などの名が付けられた大きな岩が散らばる古寺山に到着する。頂上からは本堂跡を経て行者道を下れば、裏六甲ドライブウェイに降り立つ。シュラインロード入り口から九体仏を見ながら裏六甲道路を西へ進んだカーブ№37地点が、六甲アルプスの取付点となる。

ヨモシロ谷の左岸すぐに右斜面を登る踏み跡がある。右奥にワイヤーロープで養生された岩場を見ながらの道は急登だが、踏み跡は明瞭で迷うことなく尾根に乗れる。傾斜が緩くなると岩尾根となるが、

ゲート状の岩場を抜けて六甲アルプスに入る

文字どおり山羊戸渡のようなリッジを登る

花崗岩が風化した場所も多く、慎重に歩きたい。巻き道も多いので見失わないように。途中の岩稜からは展望も開け、西側に丹生山系を望むことができる。

「六甲アルプス659m」のプレートの掛かる箇所を過ぎると、すぐに岩場の下降となる。5mほどの小さな岩場でロープも設置されているが、もろい岩場なので慎重に下りたい。やがて笹ヤブの道となり、ほどなく地獄谷東尾根分岐を通過して、シュラインロードに合流する。その後ノースロードを経てダイヤモンドポイントに出る。

そこから南下し、三国池脇を通過して縦走路を杣谷峠入り口に至る。ここにはトイレがある。峠手前から長峰山への道を進み、分岐を経て山羊戸渡入り口に到達する。東方に延びたルートは明瞭だが、岩場のアップダウンが多い。400mほど進んだピークは、南に入りやすいので注意。また、下りの岩場も慎重に。降り立った河原から小渓を渡り、表六甲道路に合流して六甲ケーブル下駅に向かう。

【コースタイム】 唐櫃台駅(30分)表山道登山口(50分)古寺山(30分)六甲アルプス登山口(50分)シュラインロード合流点(30分)ダイヤモンドポイント(55分)杣谷峠(25分)山羊戸渡始点(50分)終了点(30分)六甲山ケーブル下駅

【交通アクセス】 神戸市営地下鉄三宮駅より谷上(終点)行きに乗り、谷上駅で神戸電鉄有馬線に乗り換え唐櫃台駅へ(乗車時間：約20分)。下山した六甲ケーブル下駅から神戸市営バスが阪急六甲、JR六甲道、阪神御影の各駅を結んでいる。

【参考文献・地図】 『六甲山バイブル(登山道編)』(東　充、自費出版)『六甲山系登山詳細図(西編)』(吉備人出版)　国土地理院2万5000分の1地形図「有馬」「神戸首部」

連載■ご当地アルプス登山案内26

摩耶アルプス

関西支部　中村三佳

摩耶山は神戸市の南東部に位置し、六甲山地の代表的な山である。山上には忉利天上寺があり、大化2(646)年にインド法道仙人によって開創されたという信仰の山である。参詣道や登山道が数多くあり、山頂近くの展望広場である掬星台にはケーブルカーとロープーウェイで上がることができ、そこからの夜景は日本三大夜景の一つに数えられ、カフェあり東屋ありで、週末ともなるとハイカーだけでなく多くの人々でにぎわう人気の山である。

摩耶アルプス・ケルンから見上げた天狗道に突き上げる頂稜

【コースガイド】

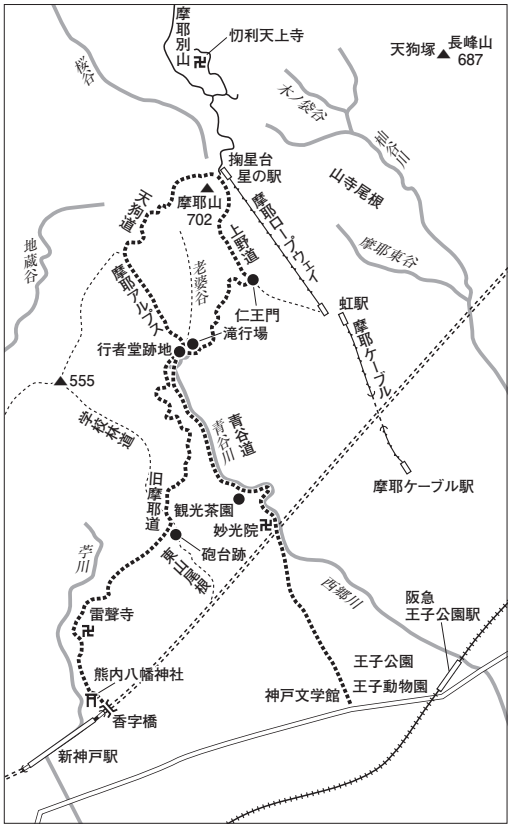
ここでは、新幹線新神戸駅から旧摩耶道を登り、「摩耶アルプス」を経て摩耶山山頂へ。掬星台で休憩を取って上野道から青谷道を経て阪急王子公園駅までを紹介する。旧摩耶道、上野道、青谷道と3つの参詣道を歩き、途中、行者堂跡地や滝行場など信仰の山らしい場所を通りながら、その一方で第2次世界大戦時の戦跡や毎日登山署名所なども通り、摩耶山の歴史と文化を味わえるコースである。

山陽新幹線新神戸駅から新幹線の線路沿いに東へ。2つ目の香字橋を渡って熊内八幡神社から雷聲寺に向かう。参拝者に迷惑が掛からないよう静かに境内に入り、お堂の右手に鎮座する不動明王像の奥、猪除けの扉が旧摩耶道の入り口だ。登り出しは急登だが、樹林に囲まれた静かな山歩きができる。

登り出してから40分ほどで「旧摩耶道・東山尾根・学校林道」の四

差路となり、そのまま旧摩耶道を進む。この四差路のすぐ右手の「東山尾根」の道標背後の高台に立ち寄ると、砲台跡がある。しばらく起伏のない道が続き、行者堂跡地に着く。石門柱の一部や石段などがわずかに残っているだけだが、周りには滝行場があり、経を唱える声が響いているときは、清浄な空気に包まれる。

行者堂跡地を通り抜け沢沿いの木橋を渡り、「天狗道・山道はこちら」の案内に従って10分ほど登ると「摩耶アルプス」の取付点の分岐となる。ここは道標がないので分かりにくく、右へ進んでしまうと老婆谷に入ってしまうので注意しよう。登山地図には行者尾根と記されているが、近年「摩耶アルプス」と言うようになった。



アルプスらしく、いきなり岩稜の急登となる。高度が上がっていくにつれ視界が開け、真正面に神戸の街と海、向こうには大都市大阪の高層ビル群が見える。夏は海からの風を受けて火照った体に気持ちが良く、秋は色付く斜面が見事である。ただし、この眺望は登りながら振り返らなければならず、くれぐれも注意して大いに振り返っていただきたい。ゆっくり登って40分ほどの行程だ。

やがて天狗道に合流する。天狗道は、新神戸駅から布引の滝を経て摩耶山へ登る人気のコースで、常に多くの人が行き交っている。放送局中継塔が現われ、「摩耶山三角点」の道標を上った所が山頂だ。三等三角点、天狗岩大神の磐座などが鎮座しているが、眺望がないのですぐ東の掬星台へ向かおう。掬星台は休憩には絶好の場所である。北へ10分ほどにある忉利天上寺まで足を延ばしても良い。

下山は上野道を下る。燈篭と石段が目印だ。このあたりからしばらくは、摩耶参詣道の中でそれらしい雰囲気が残っている道となる。台風で倒れた巨木が眼前に現われ、くぐると史跡公園だ。昭和51（1976）年に焼失するまで天上寺はこの場所にあった。再び長い石段を下り仁王門を通り抜け、道標「青谷道」と書かれている方向へ進むと、やがて行者堂跡地へ戻る。

摩耶アルプスから振り返り見た神戸の街と海

谷沿いの青谷道を下る。舗装された道なので歩きやすい。水場があり、ほどなく毎日登山署名所がある。ここまで毎日登って署名するという、六甲山で育くまれた登山文化だが、現在の最高記録は1万6000回らしい。六甲観光茶園を通り過ぎると間もなく下山口となる。妙光院からまっすぐ南へ下り、煉瓦造りの神戸文学館角を東へ向かうと阪急王子公園駅だ。

【コースタイム】 新神戸駅（20分）旧摩耶道登山口（40分）旧摩耶道・東尾根・学校林道分岐（35分）行者堂跡地（10分）摩耶アルプス取付点（40分）天狗道合流点（20分）摩耶山山頂（5分）掬星台（12分）史跡公園（35分）行者堂跡地（30分）青谷道下山口（20分）阪急王子公園駅

【山行アドバイス】 摩耶アルプスは岩稜が続くので、行者堂跡地からそのまま旧摩耶道を進んで摩耶山山頂へ行くこともできる。摩耶山にはいくつものルートがあるが、いずれも道標がありルートも明瞭なので、1年を通して楽しめる。

N
西　北
東　南
S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度でお願いします）

エクアドル・チンボラソ登山【前編】

チンボラソを選んだ理由と、コロナで断念した2年半前

石川千嘉

エクアドルのチンボラソ（6263m）に登ろうと思ったのは、3年前のことだった。2019年の8月にキリマンジャロ（タンザニア、5895m）に登頂し、それがことのほか楽しく、さらに高い所の景色を見たい、というのがもともとの発想だった。キリマンジャロから帰るなり次の山を検討し始め、短い期間で登れる6000m級の山ということでチンボラソに的を絞ったのは19年の秋、そこから現地エージェントを探して、翌年のGW実施で予約をしたのだった。

それから間もなくコロナの噂が聞こえ始め、その間に冬山のトレーニングをしていたものの雲行きが怪しくなり、とうとう直前の20年4月に渡航を断念した。しかし、エクアドルからの海外送金は難しく、返金ができないため、振り込んだガイド代はプールしておくので、状況が改善されたら来てくれと言われて2年半。その会社は律儀にもたまに連絡をしてくれ、やっと渡航規制が緩くなった昨年11月に、決行することができた。

出発と高度順応

通常、低地から来る人間は、もう少しゆとりを持ったスケジュールにするということだったが、会社員の私はそんなに長い休みをとれるわけでもなく、順応のための登山も含めて9日間の日程を組んでもらった。成功率を上げるために、事前に三浦雄一郎氏の低酸素室を借りて、順応トレーニングを計6時間行なった。

チンボラソ山頂をバックにした筆者

アメリカ経由の（渡航）ルートだったが、出入国に手間取ることもなく無事キトに着いた。到着後キト市内観光をした。赤道線見学ではお約束の水流実験（南北半球、赤道直下それぞれでシンクの水の流れ方が違うことを確認する）で地球の不思議を感じ、ローカルフードを食べるなどして楽しんだ。

2日目は世界最高地点のロープウェイに乗って、標高約3000mのキト市内から3940mまで一気に駆け上がる。地元の人たちは、イヌを連れたり、ハイキングのいで立ちで楽しげにしている。見たこともないような高山植物を見ながら、4696mのルコピチンチャに登る。この季節の天気は朝晴れ、昼過ぎから曇り、夜に雨が降るというパターンが多いらしく、山頂に着くころには曇りとなり、見晴らしも悪かったが、楽しいハイキングだった。

3日目、さらに高度順応のためにイリニザ北峰（5116m）を目指す。ステレオタイプのイメージで想像する「アンデス」そのものの雰囲気の中、麓の小屋までなだらかな道を進む。小屋は充実しており、食事もおいしい。翌朝5時半出発ということで早めに休む。翌朝、寒さはそれほどでもないが、進むにつれ岩に霧氷が着き始める。見かけは滑りそうに凍った岩を、ガイドとロープをつないで気をつけながら登ると、2時間強で山頂に到着。私は高度には強い体質と思われ、特に息切れもしなかった。

5日目は、本来エクアドル第2の高峰コトパクシを目指す予定だったが、数日前に噴火し、国立公園内が立ち入り禁止となったため、赤道直下に氷河を抱くカヤンベ（5790m）に変更となった。条件が良ければ麓の小屋まで車で入れるはずだったが、路面状況が悪く、途中から歩きとなった。深い

泥の中を進まねばならず、かなり我慢を強いられたがなんとか小屋まで到着。

小屋の裏に見える氷河はすばらしく、気持ちも高まる。ここも快適な小屋で、たまたま前日、イリニザ登山中に会った北欧からのパーティと一緒になり、話が盛り上がる。翌日、深夜に出発し、1時間ほどガレ場混じりの登山道を歩いた後にアイゼンを着ける。

しばらく行くと、彼方に見えていた一列のヘッドランプの灯りが、何か叫び声とともにばらけた。嫌な予感がしつつ歩を進めると、先に出発していたパーティが戻ってきた。聞くと、途中に大規模な雪崩が発生した形跡があり、危険なので戻るとのこと。私とガイドも少し進んでみたが、間もなくデブリを見つけ、弱層テストもしたところ明らかに危険な様相だったので、5200m付近で登頂を断念して小屋に戻った。（以下次号）

秋田市の太平山でヤマビル調査

小松芳美

「山」4月号に図書紹介された『ヒルは木から落ちてこない。』（山と溪谷社）に興味を持ち、同書を購入、ヒル調査のまねごとをした結果の報告です。

(1)参考文献

『ヒルは木から落ちてこない。』

(2)調査期間

7月5日～9月27日（この間、太平山・前岳のザ・ブーンコースを延べ19回登山）

(3)ヤマビル発見場所（以下、「ヒル」と呼称）

同コース上、特に「地蔵流れ四辻」の西側が多い。

(4)ヒル発見回数など

同コースで9回ヒルに遭遇。遭遇率47・3％、延べ21匹を駆除。

(5)ヒル遭遇時の気温

17～27度C。

(6)ヒルの生態調査

◇低温と高温

・冷蔵庫で0度Cでは丸くなり動かないが、気温が上がるにつれ活発となる。

・5度Cで少し動き始め、10度Cで正常となる。

・ドライヤーを使用し、30度Cとするも動きは正常。

◇忌避剤は有効か？

・ヒル忌避剤を靴底から約2cmの部分に散布したところ、ヒルの被害なし。登山中にヒルを発見し、靴を近づけても靴底に隠れるだけで上がってこない。

・自宅敷地内で、ヒル忌避剤を散布した近くにヒルを放つと、同所を避けて動いた。

◇ヒルの生存期間

・捕獲したヒルを密閉容器に入れ、ときどきフタを開け、息を吹き掛けてヒルの攻撃性を呼び起こしたところ、5日間生存。餌などもない状態でも生存する生命力がある。

◇ヒル駆除方法はあるか？

・ヒルに塩を掛けると間もなく絶命。ただし、塩散布後すぐに水洗したら生き返る。

・塩水および忌避剤を散布すると、数秒で絶命。

・ハサミでの切断では、中央部で切断すると頭部側は数分間動く。3等分で切断すると間もなく絶命。

0度Cになるとヒルは丸くなり、動かなくなる

◇パンストなどは効果があるか？

（参考文献の追体験）

・「ヒルはパンスト上からは攻撃できない」などとあり、自宅にて追体験し、同じ結果を確認。

・「ヒルは人の息、体温などに反応する」ということも追体験した。

(7)まとめ

ヒルの生態は、ほんの一部が分かっただけで、不明な点が多い。

◇現時点で判明している点

・忌避剤を登山靴に散布することは有効である。

・ヒル発見時には塩散布、またはハサミで切断し、駆除することが有効である。

・ヒルは靴底に張り付くことから、下山時に被害に遭うことがあるので靴底などの確認が有効。私自身、靴底のヒル被害に遭った。また、靴底に潜むヒルを数回発見している。

・ザ・ブーンコース利用の際は、特にお地蔵様の西側に注意を要する。

以上のようなことを確認し、気温、危険地帯の把握、忌避剤の散布などでヒル被害を防げると確信したところです。

（秋田支部会員）

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です。

山行委員会

「再開」となった晩餐会記念懇親山行

権現山頂上に勢揃いした参加者

今回の山行は、神奈川県秦野市の丘陵を東から西に踏破するコースで、10時スタート。ランチおよびフリータイムの広場・権現山（243m）を目指した。当日は、急に好転した小春日和となり、空は青く澄み、紅葉がよく映えた。

同行班のリーダーから、マスクを外す場合、身長程度は間隔を開けるとのご案内もあり、ウィズ・コロナ山行の要諦と認識した。私はマスク着用で、同行班リーダーの出江、砂田、早川のお三方とのお話を楽しみながらゆっくり進んだ。緩やかな稜線は良く整備されたコナラなどの広葉樹林。右手側は大山・丹沢山系の山並み。左手側は相模湾が広がり、江ノ島・湘南平の名所も見える。

終盤、西に下るピッチでは、よくある視覚効果で正面の富士山が異様な間近さとなり圧巻だった。同行班の皆さんとは、時間の制約の中で少しずつお話できたが、特に後半は名残り惜しく、あっという間に時が過ぎてしまった。秦野駅に到着し、14時半前に解散した。拍子抜けしたくらいだったが、反対に、また参加すればいつでもお会いできるという気がしている。

ともに参加した娘たちに感想を聞いてみると、山道が整えられて風景もきれいだったこと、お振る舞いの甘酒がおいしかったことなどで満足。ウィズ・コロナで会話が少な目であったにしても大人数の隊列の方が勇気が湧いてくる、楽しい、と家族で一致していることが分かった。

山行委員会、神奈川支部、同行班の皆様に感謝いたしております。誠にありがとうございました。私は、所属地区のない会員ですが、この気軽に参加できる上質な企画は、多くの会員の癒やしにもなると感じました。私ども家族4人（夫婦会員とビギナーである中2、小5の娘たち）は、お陰さまで登山を再開することができ、企画運営に感銘を受けております。

（会員番号13430　中村武史）

図書紹介

水彩の山

中村好至恵＝画・文

2022年11月
白山書房
B5変型　118ページ
2200円＋税

本会の図書委員会メンバーでもある山岳画家・中村好至恵さんの、8年ぶり2冊目の山の画文集が出版された。

本書は水彩画による「山の絵」と、随想「山の話」の2部から構成されている。

「山の絵」は北の山、東北の山、日本アルプスの山など7地域に分けて、七十余点の作品が収められている。

「帯」に書かれた言葉、「水が色彩を白いキャンソン紙に定着させる、必然と偶然の世界」は、水彩画の核

令和4年度 第12回登山教室指導者養成講習会案内

日本山岳会支部事業委員会

支部の登山教室・リーダー育成事業援助として、登山のすばらしさと安全な登山を指導する会員を育成し、支部山行の安全と充実を図り、支部の一層の発展を目的とする指導者養成講習会です。新型コロナウイルス感染症もワクチン接種その他の対策が進み、制限されている登山活動も必ず再開される日も近いことを期待しています。また、実技講習・講師を囲む懇親会は、講師や参加各支部の皆さん方の交流の場として活用ください。

◆主催：公益社団法人日本山岳会　支部事業委員会
◆後援：公益財団法人安藤スポーツ・食文化振興財団
◆日時：令和5年3月18日㈯12時30分集合：座学講義　19日㈰：黒斑山登山と雪山実技講習
◆場所：安藤百福記念・自然体験活動指導者養成センター（長野県小諸市大久保1100）JR小諸駅よりタクシー10分
◆参加費：7000円（現地交通費、宿泊費・食事3食・資料代を含む）　参加費は受付時に集金。
◆講義内容
【座学講座】「登山教室の医療」（仮題）講師＝野口いづみ・東京多摩支部長・JAC医療委員会／「頂上は折り返し点、ゴールは我が家なり」講師＝松田宏也・JAC理事・千葉支部長
夕食後、講師を囲んで懇親会を予定しています。
【実技講習】「チーム登山と初級雪山技術」講師＝宮津洸太郎（YOUTH CLUB委員、明大山岳部コーチ）講師＝杉原一樹（YOUTH CLUB委員、東海大山岳部コーチ）
◆参加資格：日本山岳会会員で、支部山行・登山教室のリーダーを目指す者。山岳保険に加入している者。
◆募集人員：20名
締切日：令和5年2月24日㈮
定員になり次第締め切ります。
◆申込み方法：1月中旬、各支部長宛に送付する実施要項を確認のうえ、添付の申込み書に記入してメールで左記アドレスにお送りください。
◆申込み先＝支部事業委員会・中村哲也まで。
✉jac-shibu@jac.or.jp
＊新型コロナウイルス感染症の状況により変更、延期されることもあります

心を言い得ていよう。「水彩」に付けたみずいろのルビに、著者の思いの深さを見る。

ジャケットの「アサヨ峰と甲斐駒」や扉頁の「燧ヶ岳」をはじめとして、多くの作品に出会う、〝水が運ぶ彩（いろ）の偶然〟すらを予測感知し、それを楽しんでいるかのような表現の妙に感嘆する。

手にした読者一人ひとりが、登って来し山々を懐かしみ、未踏の憧れの山の姿に思いを馳せる幸せな時を味わうことと思う。

第2部の「山の話」5編の随想は、スケッチ行での思いがけない出会いや、スケッチ行を支える山の相棒の話など、どの文章からも山岳水彩画制作の周辺風景に、読む側の心が温かくなる。添えられたカットも素敵である。

大きな山肌をうねるように覆う大雪田の曲線を目にして、近代彫刻の巨匠ヘンリー・ムーアを想うあたり、さらりと、わずか2行の描写であるが、中村さんの画家としての深い心を見るようである。

それにしても毎年、どれくらいの回数のスケッチ行を重ねているのであろうか？　雪の北海道へ、残雪や真夏の東北、アルプス、八ヶ岳などの山々へ……ときに自ら車を運転しながら……タフなことに驚き、感心させられる。

この本はコデックス装という製本方法が採用されている。

糸綴じの背をそのまま見るように、上製本で見られる寒冷紗という薄い布張りなどせず、そのまま糊（のり）固めして製本した仮製本様式で、「糸綴じ並製本」と呼ばれたりする。

背綴じ糸の見える武骨さと、軽やかな美しさを合わせ持ったこの製本の何よりの魅力は、手で押さえる必要がなく、全ての頁が本のノドまで完全に180度開くことにある。本書でも「飯豊大日岳」や「鷲羽岳」など見開き2頁いっぱいの絵や、片観音開き3頁にワイドに広がる「利尻富士」など、コデックス装ならではの迫力を堪能できる。

完成するまでに長い時間を要したであろう担当編集者の、並々ならぬ苦労と努力を想う。細部まで目と手の行き届いた気持ちの良い画文集に仕上がっている。

ガイド本の類いばかりが目立つ昨今の山岳書籍の、誠に寂しい出版状況下にあって、画集の枠を超えた、実に久しぶりの心安らぐ山

岳書の登場をうれしく思う。

（小泉　弘）

今西錦司と自然

斎藤清明著

2022年8月
玉川大学出版部
A5判　176㌻
2500円＋税

ご存じのように今西錦司氏は1973（昭和48）年から4年間、日本山岳会の会長を務められた方。登山家であり、探検家としても、また大学教授として生態学および文化人類学の研究に従事され、登山にとどまらず、自然科学全般に全力を注いで活躍されてきた人物である。1972（昭和47）年に勲二等瑞宝章、文化功労者、79（昭和54）年に文化勲章、92（平成4）年に叙従三位、贈勲一等瑞宝章（没時叙位陞勲）と数多くの顕彰を受けていることがその証と言えるだろう。

本書は、この著名な今西氏に憧れ、新聞記者として同行取材されてきた齋藤清明氏があたかも今西氏が自伝として書いているかのような書き方で、彼がたどってきた人生を振り返り、紹介している本である。大きな文字で、漢字にはふりがなが振られており、多くの子どもたちに読んでもらいたいという版元の意図が伝わってくる一冊。内容としては、今西氏の生涯について、幼少期から晩年のころまでを10の期間に分けて、「わたしは」を主語にして親しみやすい書き方で書かれたものである。

昆虫少年だった幼少期、山を見つけた青年期、登山に熱中した学生時代、長かった無給の研究者の時代、登山がレベルアップして「探検」となり、ついにはヒマラヤへの道が開かれた壮年期、1500山踏破を果たした晩年……それぞれの人生のステージであった出来事と、そのころどこの山に登ったかを紹介しており、今西氏の人生にとって山が切っても切り離せないものであったことがうかがえる。さらに、懇意にしていた研究者であり、登山家でもあった西堀榮三郎氏や桑原武夫氏の似顔絵も挿絵として入っていて、彼に良い山と学術の仲間がいたことも伝わってくる。

今西氏の研究分野は、昆虫学から生態学、そして文化人類学へとダイナミックに変わっているが、その根底には、「山」と「自然」をこよなく愛する姿勢を垣間見ることができ、「山岳学」を目指すようになった経緯が理解できる。ひとりの研究者が、分類学から生態学、そして文化人類学へと研究分野をシフトしていくということは、学問分野の細分化が進んでいる現代では「あり得ない」ことかもしれないが、彼のように広い視野で自然を捉える姿から学ぶことは大きいだろう。大学進学する者がごく一部の富裕層で優秀な者に限られていた当時と、「大学全入時代」とも言われる現代とでは、学問に対する姿勢も異なることが示唆される。ぜひ大学に進学し、専門分野に特化した学びを始める前の中高生に読んでいただきたい。（床田真理）

会務報告

令和4年度第8回（12月度）理事会議事録

日時　令和4年12月14日㈬　19時00分～

場所　集会室およびオンライン（Zoom）

【出席者】古野会長、坂井・山本・橋本各副会長、萩原・南久松各常務理事、松原・松田・清水・飯田・久保田・平川・

川瀬・長島各理事、佐野・黒川監事

【欠席者】柏常務理事

【オブザーバー】節田会報編集人

【審議事項】

1・ヒマラヤキャンプ宛て高額寄附の受入れについて承認した。柏（賛成14反対0）

2・「山の日」記念全国大会の2026年東京開催に向けた誘致活動のための提案について承認した。萩原（賛成14反対0）

3・山岳4団体によるコンパス共同運用を活用した「山岳安全対策ネットワーク協議会」の設立について承認した。現行の登山届との整理は継続審議とする。川瀬（賛成14反対0）

4・職員就業規定と職員給与規定の改定について承認した。柏（賛成14反対0）

5・事務局員の新規雇用条件について承認した。柏（賛成14反対0）

6・支部主催の山岳祭への補助について承認した。具体的な補助金額は継続審議。坂井（賛成14反対0）

7・事務局員の令和4年下期賞与について承認した。柏（賛成14反対0）

【協議事項】

1・特になし

【報告事項】

1・正会員12名、準会員13名の入会承認報告があった。（古野）

2・寄附金3件の受入れ報告があった。（南久松）

3・全国博物館等連絡会議開催について報告があった（清水）

4・山行委員会委員長の交代について報告があった。（長島）

5・年次晩餐会の結果について報告があった。晩餐会参加者344

寄附金および助成金などの受入報告（12月まで）

寄附者など	受入金額など（単位千円）	寄附の目的、その他
西川 哲彌 会員	12	群馬支部登山振興事業資金として
佐藤 正雄 会員	20	永年会員からの寄附金

図書受入報告（2022年12月）

著　　者	書　　名	頁／サイズ	発　行　者	発行年	寄贈／購入別
ウインター・クライマーズ・ミーティング（編）　菊地敏之（編）	冬期クライミング（改訂）　クライミング・ガイドブックス	224p／21cm	白山書房	2022	出版社寄贈
工藤隆雄	山の今昔物語：山は人間の想像を超える場所	256p／19cm	天夢人	2022	発行者寄贈
中村好至恵	水彩（みずいろ）の山	118p／23cm	白山書房	2022	著者寄贈
冠松次郎	新編　山渓記　紀行集　（ヤマケイ文庫）	623p／15cm	山と溪谷社	2023	出版社寄贈
宮崎妙子	わたしのカラコルム　：人生の第四楽章は トレッキングとNGO活動から始まった	256p／20cm	K2Publications	2022	発行者寄贈
針葉樹会・前神直樹（編）	一橋山岳部　百年　1922～2022	222p／27cm	一橋山岳会	2022	発行者寄贈

名。講演会参加者約250名（長島）

6・創立120周年記念事業宛て募金について報告。11月25日時点で253名、約630万円。（柏）

【その他】

1・「山」12月号の発行について報告があった。（節田）

ルーム日誌 10月

1日　総務委員会　山岳地理クラブ
5日　総務委員会
6日　常務理事会　スケッチクラブ
7日　山行委員会　山岳古道PT
8日　図書委員会
13日　フォトクラブ
14日　理事会　休山会
15日　記念事業委員会　グローバルクラブ
16日　記念事業委員会
17日　アルピニズムクラブ
19日　財務委員会　資料映像委員会
20日　フォトクラブ
21日　会報編集委員会　つくも会
三水会　麗山会　かっぱの会
22日　財務委員会　山遊会
23日　資料映像委員会
26日　資料映像委員会　青年部緑爽会
27日　平日クラブ

12月来室者　167名

会員異動

物故

小倉董子（3908）22・12・3
岩橋崇至（9374）22・11・28
鳥居和雄（12068）22・9不明
黒田記代（14591）22・12・9

退会

岡市敏治（10172）関西
川　朋子（11101）神奈川
千先　勉（12221）
中山　哲（13608）
竹渕　弘（15480）福岡
海野俊久（16233）静岡
加藤大雄（16471）
加藤真美（16472）
神山朋子（16472）富山

INFORMATION インフォメーション

◆いいとこ歩き遍路②高知・愛媛

山行委員会

四国八十八ヶ所1200㎞を春秋4回の区切り打ちで歩きます。歩きに適した遍路道を選びました。2回目は高知県（修行の道場）29番国分寺から愛媛県（菩提の道場）51番石手寺まで順打ちします。諸作法はお教えします。遍路用品の購入はご相談ください。45番岩屋寺では山岳修験者の行場である「せりわり禅定」に挑戦します。

日程　3月14日㈫～3月18日㈯　4泊5日

集合　14日㈫　JR高知駅改札口　8時40分。13日㈪夜行バスで朝着あるいは前日高知泊。

行程　14日　高知駅＝29番国分寺＝31番竹林寺―32番禅師峰寺＝33番雪蹊寺―長浜（泊）　15日　34番種間寺＝埋立＝横波―多ノ郷＝窪川駅―37番岩本寺（泊）　16日　窪川＝中村駅＝足摺岬―38番金剛福寺―足摺岬＝中村駅＝平田駅―39番延光寺＝宿毛駅＝40番観自在寺―愛南町（泊）　17日　宇和島駅＝41番龍光寺＝42番仏木寺―43番明石寺＝45番岩屋寺―久万高原町（泊）　18日　44番大寶寺＝塩ヶ森―46番浄瑠璃寺―51番石手寺―道後温泉（解散）

歩程　1日1～6時間（やや健脚向き）

費用　参加費2万円（通信費、写真代など）、1日約1万円（宿泊代はその都度精算、賽銭、納経、昼食代）、傷害保険は各自お掛けください。遍路用品は約2万円。別途往復交通費。

定員　8名（先着順）

申込み開始日　2月1日～3月10日まで　数見（すみ）　直（ただし）

本会新規事務職員募集

本年5月に迎える本会事務職員の定年退職により、新たに1名の事務職員を採用します。

会務に関わり積極的に会をサポートしたい、登山を愛し会員サービスができる人材を募集いたします。条件等は左記のとおりです。本会会員資格の有無は問いません。ご応募お待ちしております。

【就業場所】
東京都千代田区四番町5番4
サンビューハイツ四番町　最寄り駅=市ヶ谷駅（JR・東京メトロ・都営）、麹町駅（東京メトロ）

【就業時間】
早番（10～18時）と遅番（13～20時）の交代制。交代で月1回の土曜出勤あり

【職務内容】
図書室の書籍管理のほか、会員向けサービスのための事務

【就業開始日】
2023年4月3日(月)

【給与】
19万円以上（資格、経験による）

【賞与】
あり

【休日】
週休2日制（交代で月1回程度の土曜出勤あり）。年末・年始、そのほか祝日など本会が指定した休日あり。そのほかは本会の規約による

【資格・条件】
司書の資格、あるいは図書館勤務の経験があれば、なお可。パソコン操作に熟知し、これまでも仕事でオペレーティングシステム、オフィススイート、コミュニケーションツール、表計算ソフトなどを使用してきた方であり、日常的にwebにも親しんでいる方

【社会保険・労働保険】
完備

【試用期間】
3ヶ月

【提出書類】
履歴書、職務履歴書（業務で使用できるパソコンのソフトやアプリも記入）、志望動機〈簡単でよい〉

【選考について】
書類選考の結果、面接を実施

【応募・問合せ先】
e-mail：jac-saiyou@jac.or.jp

【応募締切】
2023年3月15日(水)

総務担当理事　柏　澄子

TEL 090-7204-4668
✉ sanko@jac.or.jp

◆第32回「山好きの山の絵展」開催

アルパインスケッチクラブ

この絵展は毎年2月に開催しており、今年度は第32回として開催します。60人の会員が実際に登り見た山々を描いた作品、水彩画・油彩画・版画など約70作品と、スケッチブック10点近くを展示します。毎年山好きの方々のほか、多くの一般の方にご来場いただき、ご好評いただいております。皆様のご来場をお待ちいたします。

会期　2月19日(日)～2月25日(土)10～18時（初日は11時45分から／最終日は16時30分まで）

会場　JR有楽町駅前　東京交通会館B1Fゴールドサロン（千代田区有楽町2―10―1　TEL 03-3215-7962）

入場無料

＊今年は「登りたい心で描いた山のスケッチ展　最終章　田邉壽」を同会館B1F　エメラルドルームにて同時開催します。

❖編集後記❖

●沢木耕太郎さんの新著『天路の旅人』を早速、買い求めました。戦中に密偵として西域に潜入し、足掛け8年もの破天荒な旅をなした西川一三さんの足跡を追ったものです。現役編集者時代、江本嘉伸さんの『西蔵漂泊』を担当したので西川さんの存在は知っていましたが、沢木さんがどう料理されるのか、興味を持って読みました。

●西川さんとの面談に加え、没後に3200枚もの生原稿が見付かったことにより、彼の旅を俯瞰的に綴ることができたようです。西川さんは困難な旅を重ねながら、未知を求めて彷徨（さまよ）う純粋な旅人に昇華していったのでしょう。かつて夢中になって読んだ『深夜特急』とともに、また沢木さんから大きな刺激を受けました。**（節田重節）**

日本山岳会会報　山　932号

2023年（令和5年）1月20日発行
発行所　公益社団法人日本山岳会
〒102－0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL　東京(03)3261-4433
FAX　東京(03)3261-4441
発行者　日本山岳会会長　古野　淳
編集人　節田重節
E-メール：jac-kaiho@jac.or.jp
印　刷　株式会社　双陽社